慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	北・ 南/体壁系・ 内臓系：「身体の2重性」
Sub Title	
Author	松尾, 信明(Matsuo, Nobuaki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2004
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.58 (2004.) ,p.98- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成15年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000058-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

the North East India History Association, Shillong, India にまとめた。

2) ネリーの虐殺については以下の論文に成果を発表した。Kimura, Makiko (2003) 'Memories of the Massacre: Violence and Collective Identity in the Narratives on the Nellie Incident', in *Asian Ethnicity*, Vol. 4, No. 2.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程

北・南/体壁系・内臓系
——「身体の 2 重性」——

松 尾 信 明*

私は或る出版社から旅費をもらい，津軽旅行を企てた。その頃日本では，南方へ南方へと，皆の関心がもっぱらその方面にばかり集中せられていたのであるが，私はその正反対の本州の北端に向って旅立った。

（太宰治「十五年間」）

1. 体壁系・内臓系

1-1. 身体

わたしは，解剖学者，故三木成夫の研究に依拠する。三木によれば，人体は「内臓系」（＝植物性器官，splanchnon）と，「体壁系」（＝動物性器官，organon）とに分けられる。ここに，「身体の 2 重性」がみられる。

人体にみられる植物的機能とは，吸収-循環-排出の諸器官が担い，特に循環系が中心である。人体にみられる動物的機能とは，感覚-神経-運動の諸器官が担い，特に神経系が中心である。体壁系は，その感覚機能と運動機能を仲介する神経系の中枢部，脳髄によって，代表される。これに対し，内臓系は，その吸収機能と排泄機能を仲介する循環系の中心部，心臓によって，代表される（三木 1992a: 146）。

つまり，内臓系の動きは，心臓で代表され，体壁系の動きは，脳で代表される。心情と精神は，この心臓と脳に由来したもので，それぞれ人体を 2 分する“植物的ないとなみ”と“動物的ないとなみ”を象徴する（三木 1997: 38）。以上から，体壁系-脳-mind, 内臓系-心臓-feelings, ということが言える。

従来の身体論では，〈身体〉のうち体壁系のみに分析が偏り，内臓系は見落とされていたと言いうる。人間の身体とは，体壁系と内臓系，ふたつあわせて〈身体〉なのである。そうであるならば，「身体論」というものも，それを反映したものであらねばならないはずである。

1-2. 身体論

湯浅 (1996) は，こうした体壁系と内臓系という，「身体の 2 重性」に着目している。従来の身体論，それは特にメルロ＝ポンティを代表とする，と言ってもよいであろう。メルロ＝ポンティもまた，視覚，触覚，運動，といった体壁系に関する研究は残していると言えようが，内臓系に関してはその視野に入っていなかったと言えると思われる。身体の中，それを「器官の詰まった暗闇」(Merleau-Ponty 1964＝1989: 192) と記述する彼にとって，内臓系とは言わば，「ブラックボックス」のようなものであったの

ではないだろうか。

デカルトも言うように，われわれは，内臓系を意識することができない。これが，内臓系が不随意系である，ということである (Descartes 1641＝1978: 302)。内臓系とは言ってみれば，「内なる非自己・他者」たる存在，なのである。

現在の，特に 1997 年 10 月 16 日，「臓器の移植に関する法律」(「臓器移植法」) 施行後の身体，自己とは，内臓系と強く関わっているのだと言いうる。自己の内なる他者たる内臓系を他者と交換することが，臓器移植である。これまで，内臓系はあまりにも顧慮されてこなかった。ところが，現在，内臓系，そしてそこからひろがることになる，言わば「非個体的な身体」(非個体性) と言うべきものが，非常に重要性を帯びていると考えられるのである。

従来の身体論を更新するということだけではなく，社会制度と個の相互変容という観点，そしてさまざまな文化事象に，内臓系をめぐる事象が表象されているという観点。これらが，わたしの研究のもつ，社会学的な意義，ということになろうか。わたしは，当座はあえて図式的な構えをとる。

1-3. 京都へ

以上の問題意識に基づき，わたしは，2003 年 12 月 6 日，京都女子大学で行われた「日本現象学・社会科学会」第 20 回大会において，『「身体の 2 重性」――内臓系アイデンティティの冒険――』と題する報告を行った。そこでわたしが実感したものとは，メルロ＝ポンティの身体論が，いかに深く根をもっているか，ということであった。

2. 北・南（南方へ）

三木は，「南と北の生物学」を構想する（三木 1992a: 137)。これについて，単なるイメージでしかないという批判もありえよう。しかし，この構想は，三木解剖学の知見が総動員された，示唆に富むものであると，わたしには思えるのである。三木によれば，体壁系とは北，内臓系とは南である。

わたしは，従来の身体論に，内臓系のもつ意義を付加し更新すること，このことを狙いとして定めている。三木を踏まえればよって，わたしの試みとは言わば，南方へ向うものなのである。その点，冒頭に引用した太宰の試みとは異なる。しかし，同時代の支配的な流れに掉さし出立する点，同型の試みなのである。北と南，「2 つの視野の統合」(加藤 1999) が求められているのである。

3. 触覚-舌-味覚（統合への途）

敢えて「図式的」な構えを，(戦略上) 行うとわたしは先に書いた。では，そののち，北と南，その統合の方途はどう探られるべきなのだろうか。逆説的でもあるのだが，メルロ＝ポンティの身体論こそが，その糸口にあたるとわたしは考えるのである。

メルロ＝ポンティは，触覚の一環としての舌，とでも言えることを書いている。「私の指や舌とのそれらのざらざらした接触」(Merleau-Ponty 1964＝1989: 225)，と。ここに，北と南，その統合への途がある。

触覚とは，体壁系と結びついている。味覚とは，人間の五感のうち，内臓系と直結している（三木 1983: 45-46)。メルロ＝ポンティは触覚の一環として，舌を扱った。舌と何ものかとの，「ざらざらした接触」。ここから，味覚へ。言ってみれば，舌を媒介とした，触覚－味覚の統合の試み，これが，北・南/

体壁系・内臓系，2つを統合することにつながるのでは，ないか。

わたしは，以上のような観点から，特にメルロ＝ポンティの身体論を仔細に検討することと同時に，味覚，（そしてこれに関連するものとしての「食」）というものを，さらなるテーマとして追究してゆきたいと考えている。ハビトゥス概念のキイとしての「趣味＝味覚」(Bourdieu 1979＝1990: 156) をあげるブルデューも，この試みに関係してこよう。これだけを述べれば奇矯にもきこえようが，ハビトゥスとは，内臓系と結びついた概念なのである。

味覚の連続性，アリョーシャの桜んぼのジャム（『カラマーゾフの兄弟　上』）。冒険は続くのである。

主な参考文献

Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit, Paris.（石井洋二郎訳，1990,『ディスタンクシオン［社会的判断力批判］I』藤原書店）

Descartes, René, 1641, *Meditationes de prima philosophia.*（井上庄七・森　啓訳，1978,『省察』『世界の名著 27 デカルト』中央公論社

Fox, Renée C., & Swazey, Judith P., 1992, *Spare Parts: Organ Replacement in American Society*, The Acadia Institute.（森下直貴・倉持　武・窪田　倭・大木俊夫訳，1999,『臓器交換社会』青木書店）

Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press, Cambridge.（松尾精文・小幡正敏訳，1993,『近代とはいかなる時代か？』而立書房）

市野川容孝，2000,『身体/生命』岩波書店.

————，2001,「individual としての身体——医学と社会理論の交差」『社会思想史研究』NO. 25.

加藤典洋，1999,『可能性としての戦後以後』岩波書店.

真木悠介，1977→2003,『気流の鳴る音』筑摩書房.

Merleau-Ponty, Maurice., 1953 et 1964, *Eloge De La Philosophie L'oeil Et L'esprit*, Éditions Gallimard, Paris.（滝浦静雄・木田元訳，1966,『眼と精神』みすず書房）

————，1964, *Le Visible Et L'invisible*, Éditions Gallimard, Paris.（滝浦静雄・木田　元訳，1989,『見えるものと見えないもの』みすず書房）

三木成夫，1983,『胎児の世界』中央公論新社

————，1989,『生命形態の自然誌　第一巻　解剖学論集』うぶすな書院.

————，1992a,『海・呼吸・古代形象』うぶすな書院.

————，1992b,『生命形態学序説』うぶすな書院.

————，1995,『内臓のはたらきと子どものこころ　増補版』築地書館.

————，1996,『人間生命の誕生』築地書館.

————，1997,『ヒトのからだ』うぶすな書院.

見田宗介，1996,『現代社会の理論』岩波書店.

Nancy, J.-L., 2000, *L'intrus*, Éditions Galilee, Paris.（西谷　修編訳，2000,『侵入者』以文社）

大平　健，2003,『食の精神病理』光文社.

Sartre, J.-P., 1938, *La Nausée*, Éditions Gallimard, Paris.（白井浩司訳，1994,『嘔吐』人文書院）

Simmel, Georg, 1900, *Philosophie des Geldes*, Duncker & Humblot, Berlin（居　安正訳，1999,『貨幣の哲学（新訳版）』白水社）

副島隆彦，1998,『完結・英文法の謎を解く』筑摩書房.

上野千鶴子編，2001,『構築主義とは何か』勁草書房.

鷲田清一編，2003,『〈食〉は病んでいるか』ウェッジ.

湯浅泰雄，1996,「身体と間身体関係」『岩波講座　現代社会学　第 4 巻　身体と間身体の社会学』岩波書店.

『環』Vol. 16, Winter 藤原書店.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程